川西航空機鶉野工場での勤務のこと

島崎康（父から聞いた話、当時、和歌山市在住　15 歳頃の話）
島崎雅（祖父から聞いた話）

島崎康

太平洋戦争末期「紫電改」という日本海軍の最新鋭戦闘機が鶉野飛行場に隣接した川西航空機姫路工場（現在の新明和工業）で製作されていました。

私の父は和歌山市から動員され隣接する工場で働いていました。その時彼は 15 歳でした。「紫電改」の機銃の部分を担当していたそうです。私が幼い頃は太平洋戦争で活躍した戦闘機といえば、零戦しか思い浮かびませんでしたが、「「紫電改」は「零戦」をはるかに凌駕する性能を持つ世界一の戦闘機である。」と父は主張しました。そして自身がその戦闘機の製作に携われたことを大変誇りに感じているようでした。それとは逆に、おそらくお盆や年末年始だと思うのですが、たまに実家に帰省できる時はとても嬉しかったとも言っていました。帰省にあたり、おそらく父は汽車に乗って帰省したと思うのですが、鶉野飛行場で父が勤務している時は既に、日本の空の制空権も米国のものになっており、汽車による帰省がどんなに危険を伴うものかは容易に想像がつきます。しかし、そのような危険をおかしても帰省したいということは工場や寄宿舎での暮らしがよほど辛かったのだと思います。

遡ること約 30 年前、私が大学 4 年生の時、就職活動のため川西航空機の後身の新明和工業を訪問し人事面接を受けました。私が父の話をすると、面接官は「川西航空機に姫路工場があったという話は聞いた事が無い」といわれました。帰宅しそのことを父に言うと、「絶対に川西航空機姫路工場はあった、現実に自分がそこで働いていたのだ！」と言ってその面接官の話を真っ向から否定しました。私は「内心大昔の話なのだから、父は何処かで記憶違いをしているのだろう。」と自分を納得させて、父との議論を打ち切りました。そしてその後、東日本大震災の約 1 か月後に父は病で亡くなりました。しかしながら、新明和工業の面接官に否定された無念の思いは依然私の心の中にありました。

ところが数年前、SNS 等で「日本で唯一と言っていいほど、ほぼ完全な形で残っている飛行場跡や施設群がある」とちょっとした騒ぎになりました。それが鶉野飛行場跡です。父が話していたことは本当だったのです。このことについて、「鶉野飛行場が近年になるまでベールに包まれていたのは、そこが軍事的に重要な施設なので極秘扱いにされたのではないか、したがってこの飛行場や施設に関する資料も意図的に処分したのではないか」と仰られる方がおられます。私はこのことを息

子にも伝え、15 歳という多感な年頃の少年が観た風景を息子と共に共有したいと思いました。そしてこちらの飛行場跡や関連する戦争遺跡の案内をお願いしました。見学当日は見事な晴天で、ガイドの方は、防空壕や弾薬庫そして機銃座などの遺跡を丁寧に案内してくれました。その後滑走路跡に赴き、そこを歩きながら「紫電改」が離陸する姿を想像していました。最終目的地の「sora かさい」では、「紫電改」や「九七艦攻」の実物模型とともに「ストーリーウオール（映像）」を観ました。最後のシーンで鵜野飛行場の滑走路から「紫電改」が離陸するシーンがありました。これこそ亡き父が観た「紫電改」なのだと思いました。父には後 10 年永く生きてほしかった、心からそう思っています。

島崎雅

私の祖父は実際に鵜野の川西航空機の工場で勤務していました。今回は祖父の青春を感じるためにここまで足を運びました。今でも残るかつての飛行場の跡地などを歩いていると大変感慨深い思いで胸がいっぱいになりました、同時に平和のありがたさを改めて感じられました。今回の経験をもとに平和の大切さを次の世代に伝えていくのが私の使命であると思いました。